

令和 7 年度（2025 年度） 第 10 回小原地域会議 会議録

開催日時	令和 8 年 2 月 3 日（火）	開会	閉会
		午後 6 時 30 分	午後 8 時 30 分
会 場	小原支所 第 2 会議室		
出席者	委 員	竹内正美（会長）、白川悠理（副会長）、景山卓己、大林鐘次、安藤茂則、板倉正典、増岡正博、加藤元紀、山内明、成瀬啓一、田澤由佳、鈴木孝典、濱辺誠一	
欠席者	成瀬友昭、岡田口治、小出透、無州麻美、伊藤大悟		
次 第	開 会 1 あいさつ 2 里の駅構想について ・ 構想実現に向けた今後の進め方について ロードマップ（案） 事業立ち上げの事例紹介 今後の検討内容（案） —コンサルタントからの説明後、意見交換— 3 その他（連絡事項等） 閉 会		

■ 議事要旨

2 里の駅構想について

1. 計画の進め方と継続性について

- ・ 2034 年にグランドオープンとすると約 8 年先となり、その間に地域会議の委員が入れ替わってしまう。この流れが続けられると良いが、継承されるのか。
- ・ 地域会議とは別に特化した少人数の部会を設け、その人達が続けていく体制が良いと思う。
 →地域会議の委員が変わっても、「第 2 期おぼらみらいプラン」に基づき、事務局で考え方を引き継いでいく。
 →グランドオープンまでには、実証実験を重ねて成功させ、「この形でいく」という機能が確立している必要がある。
 →グランドオープンを目指すだけでなく、次年度から実証実験を「やってみる」必要がある。

- ・ 議論だけでなく、実際に動き出すことが重要である。
- ・ プレイヤーとして関わりたい。
- ・ できるところから始め、実施する中で人員や経費などの課題がでてくると思うので、検証を行いながら進めていきたい。

2. 運営体制と組織の役割について

- ・ 実証実験は誰が実施し、検証する母体はどこになるのか。
→実証してみるのはわくわく事業の団体や民間事業者を想定し、地域会議はサポートや検証する役割と考える。
→「やってみる」の進め方の例として、他地域の事例を紹介。
- ・ 観光協会にも関わってもらわなければ実証を進めにくく、情報発信もうまくいかない。他地域では観光協会が窓口となり、有志のボランティアに依頼する形が多い。
- ・ 観光協会と有機的につながり、Instagramなどの情報発信が広がっていくと良い。
- ・ この1年の中で、中心となる事務局や事務担当者を設け、音頭を取る体制を整えたい。
→現状では、観光協会が窓口となって全てを請け負うのは人員的に難しい。
→観光協会に丸投げするのではなく、持続的に進められるマンパワー体制を構築することが重要である。
- ・ 地域会議での熱量が町内会長や役員に十分に伝わらず、その地区の住民にも伝わりにくいという課題がある。周囲にも伝えていきたい。
- ・ 取り組む人が「楽しい」と感じられることが一番大事だと思う。

3. 実証実験の場所と手法について

- 実証実験を整備イメージ図のどこで行うのか、自分たちの活動スペースなのか、公共空間なのか。
- 自分たちの活動拠点で行うのか、小原地域内の別の場所で試し、うまくいったものを和紙のふるさとで実施するのか、最初から和紙のふるさとの一部を使うのかが分からない。
- ・ リアリティがある場所で実施したらいいと思う。情報発信していくことが「里の駅」の役割と思う。
- ・ せっかく拠点を「和紙のふるさと」でまとめたのに、里の駅の場所を概念化させてしまうと、議論が振り出しに戻ってしまう。始めの一步は、「和紙のふるさと」が良いと思う。

4. 具体的な事業や活動アイデアについて

- ・ 実証実験①として、キッチンカーを募集したり、地域のパン屋やコーヒー店を招き、駐車場でイベントを実施してはどうか。初回は「和紙の日」となる8月4日が良いと思う。
- ・ 実証実験②として、和紙のふるさとの広場でキャンプを行い、親子のふれあいや小原の人との交流、地域の自然を体感してもらうのも良い。
- ・ 和紙に漆を塗って丈夫にして、和紙を使ったテントなどのイベントも考えられる。
- ・ 和紙を使った子ども歌舞伎の衣装づくりも良い。
- ・ 移住者の中で田んぼをやっている人がいるので、仲間を集めて農業体験などを行ったらどうか
- ・ 小原には山城が11か所あり、地獄谷や杉田久女などもある。電動アシスト自転車を使った1~2時間のガイドツアーやハイキングが考えられる。
- ・ 小原は月や星がきれいなので、月1回の満月祭を里の駅で開催したい。
- ・ 和紙とうるし工房の空き施設を活用したカフェがあると良い。
- ・ 小原米と地域にある型を使い、「小原おこし(菓子)」を作って販売するのはどうか。

5. 資金と支援策について

- ・ まずは「わくわく事業」を活用し、里の駅の実証実験としたら良いのではないか。
→実証実験は、わくわく事業だけでなく地域課題解決事業としても活用可能であり、途中から予算化することもできる。
→予算化には、どこまで実現可能かという具体案と実現性が大事になる。

3 その他（構想実現に向けた進め方）

第10回（2月3日）：実現に向けた進め方について

第11回（3月3日）：第2期おぼらみらいプランの実現に向けて